

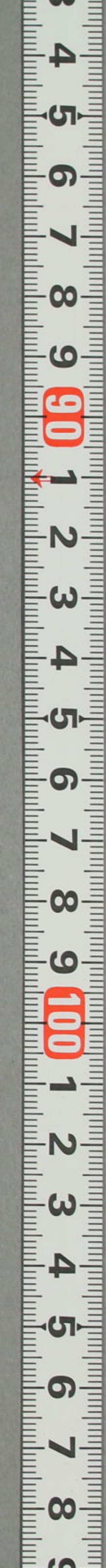
朝夷巡嶋記

初輯

一



^ 13  
3568  
1



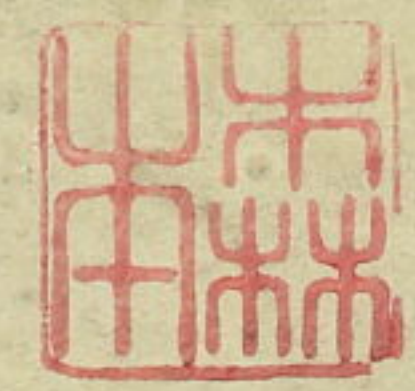
門 13  
號 3568  
卷 1

曲亭主人編輯

# 朝夷巡鳴記

一柳齋豐廣畫

初輯五卷  
文金堂梓



早稻田  
昭 31  
藏



刊字續像擇良工  
製本精妙第一番



最就於倉卒之際。及命工繡梓。未有自  
而書賈又巧之。誅求如債。將綴數行。以  
共責。方是之時。毛穎氏致仕。楮先生離散。  
召之未至。卒然搜破篋。不意獲墨本一頁。素  
吾藏奔之物。平義秀尺牘也。雖其書非肉筆。  
歷歷由來存焉。既已忘有是書。今不求而出。  
猶如有神。知吾可用。可謂奇矣。即影寫之。以  
代序辭。聊又陳其事。書右端。趙再白嘗有詩  
曰。名士本來如畫餅。古人原不好真龍。併錄  
之。使閱者知愚意。  
文化甲戌冬至除夜  
簞笠陳人解撰



朝夷三原義秀尺牘

朝夷初編卷一

一文金堂

去月粒方年

方月粒方年

守州所

守州所

守州所

守州所

月長初編卷一

三

人各始也。よその終りなれど鮮し夫始也。終るるも世以ては庸庸人とはせ  
 庸人の名ゆえを據りて用ふる所なり。但戦國の勇士は若くも或も  
 君を縛りて後世に活すも亡命し又國傾を城陷すの日千軍萬馬を殺奔し  
 一條の血路を開き或は偽て自焼し屍を焦土の中示し。その死も山林の  
 隠す夷狄にまり又人間に還らざるものもその終りもあらずや。若れども  
 敵をえて苟も死さざるは賊とせしめんとす。時運を揣て仇を避性  
 命と全と取らば雪んと思ふるも志ありしに人言はば天は復たしむるも是  
 らを跡を暗く影を埋め形と変名或改め禽獸と群居し。山経は老死せし  
 の抑幾人ぞ今軍紀もふる野數人は過を所云平惟盛源義経朝夷  
 義秀藤藤房後塚伊賀の如るに逃にゆく忠走りても勇とせん  
 直その迹を後ならの亦千載の遺憾るるもや。その中小義経胡地はま  
 よの往にとい戎野史もふる義秀後塚亦至る又その終り果るのほ予の

二勇士のふ假托し。四字小説を借して彼長物を獲たり。その年ありては  
 果さばの春又といひ起し。やがて義秀のりもまほむむ名ついで朝美巡嶋記と  
 小の事虚中小実成包て唐山演義の書に據りたる。その東盛盛衰  
 記及諸軍紀も據るやもあらず。又草紙小勇力監といふものありと  
 推しての隠しては成あらず。後世は述るといひん飲者らも喜成古人小獲づく  
 織を今人といはれど又釋氏をとりて定規とせざる。其の自らも成  
 勸り悪成懲らしむ善巧方便とやいへば。今茲も夏も小恙ありては  
 ろが成過さば。筆硯親中時後まぬと驚き直りの終りも終り  
 誤脱を補へ暇の。そ成又も。その人浪連人の需は心づく。その  
 肇集五卷の繕をむくくものあり。

養登陳人再撰

朝夷巡嶋記全傳初輯總目錄

第一條

栗津原六出

鎌倉山鼠麴

第二條

月夜竊立鳥

鷄鳴野嶋船

第三條

遠山寺兒櫻

山脚村教草

第四條

濱驛館蒲黃

修善寺奔湯

第五條

絲素幡太薄

促死秋蟄居

第六條

截落刀野帑

返汝湯嶋檜

第七條

林坂牛奔車

櫻虛崑崙佛

第八條

歸郷野邊送

復讐記念刀

第九條

朝霧庄司璽

夕立許我郷

第十條

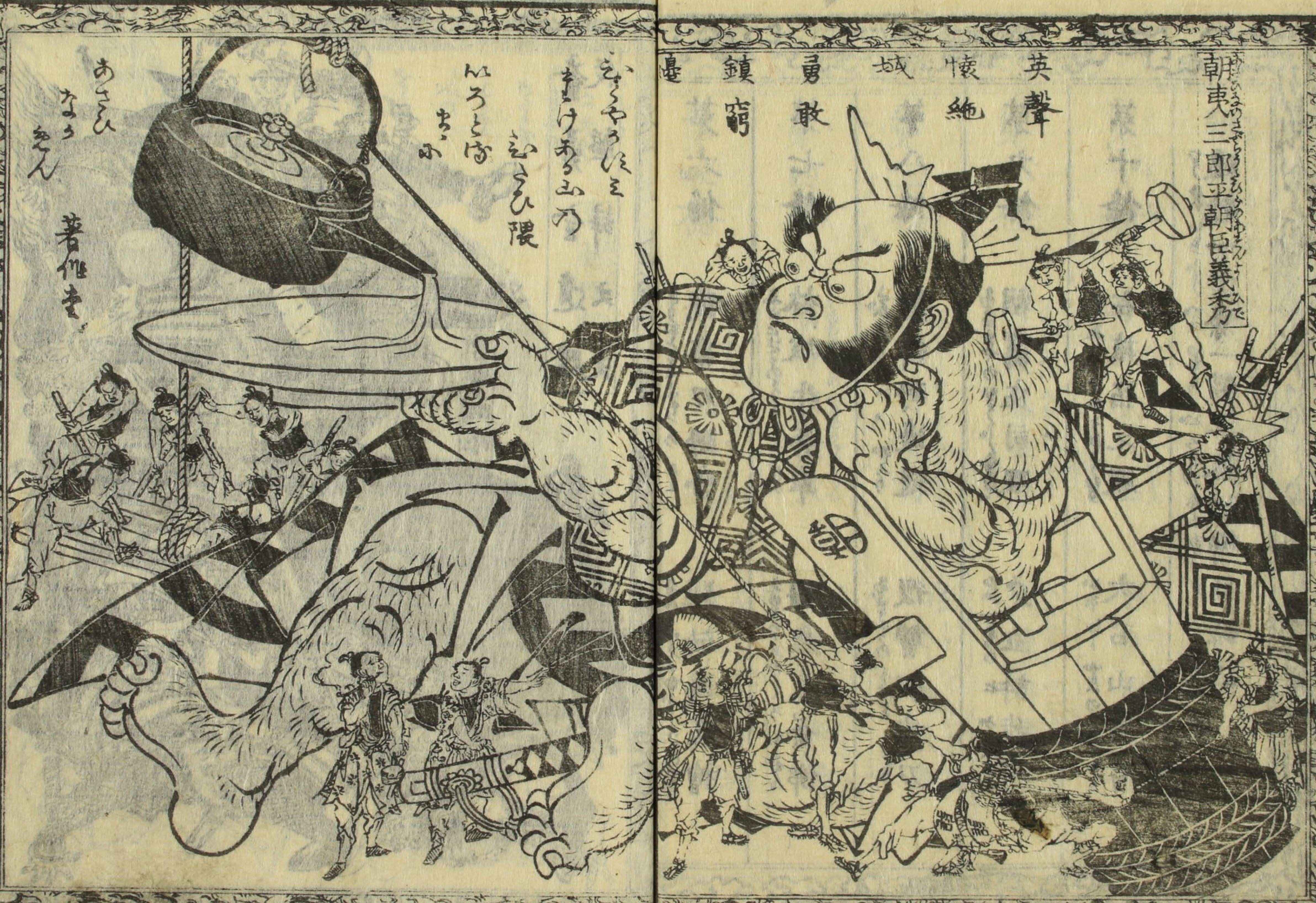
在旅宿元服

大石山遺弓

通計一十條一帙五卷初輯目錄終

朝夷三郎平朝臣義秀

英聲 絶 懷 城 勇 敢 鎮 窮



心くやうはと

まけあるふ乃

心くは限

はろとほ

ちふ

あふひ

たふ

せん

著作者



次風乃  
あまの  
かまの  
あまの  
かまの  
あまの  
かまの

源範頼朝臣



河三二廣光

月夜刀編卷一

奮勇全遺  
殺軀文腹



勇帝繪

朝美新編卷一

五

山の主 寛平太



庵丁のひか

ふる舞の袖がら

むとさへせん

いさえなり魚

處女 友麻

まろし  
とろろ  
風天  
きん  
き  
みと  
つ  
ま  
乃

吉原 寛平



侍 寛平

温子 寛平





西風乃  
おの  
似方  
人あ  
わら  
のち  
あ  
ま  
そ  
ま

乃野太郎時夏



駿河前司源廣綱

下のゆゑのむす  
水子成り  
をふそと  
うんてれ

目見



信濃路小起せしより。同年の冬、十月より戦ひ捷攻め取り。旗と華洛ふ推靡と平氏を西海へ逐走せし。源家三平の整懐を一時は用くのを、白河の仙茂之且く守護せし。勲績莫大なり。官爵輒父祖を超く。武の棟梁と仰れし。功は誇り勇と憑く君を蔑りたり。非礼狼藉大なる。比羅藤倉小笠原一平前武衛頼朝之臣朝敵義仲追罰の院宣を賜ふ。舎支範頼義経と追討使と定めり。数万の東軍前駐し。鬼道瀬田より上洛を時元暦元年正月九日義仲これを防んと。廷尉義廣四郎兼平以下の精兵を兩隊小分け。少選防戦あり。不慮の合戦。その棧を襲ひ躬方は繞る軍兵を多く不果敢る。華洛と落されて木曾殿主後借小七騎且戦ひ且まれども越路と抜くゆえあり。兵脱を以て。田春の雁列を素くと。獲と立羽音小信と見え。是首被首元満る。

敵はあふとの粟津なる。森林のほとり。木末のひら瀬田の夕照は凍釋る。残雪の飛花落葉。後れ先づの兼平亦彼此より隔らば。大将一騎のり。ゆきれのまじとも何ゆせん。前面の芝生より立て腹を切らんと。只官小馬の足撞とせしめつ。多ひる日を背後不せ。しが執事も薄氷の深田。馬を乗せし。拍とあふ。息とほも出せ。ある便る。と夕間暗え。ぬる。兜乃星月夜。隕て石田。名久。護つ。箭は。額と項へ。遊四五寸。うらやかく深。瘡は。小妻時ゆゆ。堪を抱え。臥ゆ。義仲。移れ。ひぬ。と敵の軍兵。馬散動。今井根井。指。綿織。大。約。木。曾。殿。恩。顧。の。老。黨。義。小。信。和。と。ま。さ。る。ゆ。の。誰一人も存命せぬ。箭の。竭。大。刀。へ。折。る。ゆ。の。奮。怒。突。戦。せ。る。ゆ。の。乱。軍。の中。小。移。れ。ゆ。の。そ。が。中。小。當。今。一。の。勇。婦。と。ま。え。し。朝。繪。八。四。郎。兼。平。が。妹。義。仲。朝。臣。の。側。室。の。り。の。剛。者。る。ま。北。國。數。度。の。戦。ひ。比。類。る。た。切。死。

ちく。その名の都鄙の高うりた。さきつをもちこの日この時主後七騎は  
 るるちくも柱の敵を殺散し。さきつ先へ進み木曾殿これとてあ  
 義伸が最期の軍小女人は先陣をさしつる。いかに人の朽惜るべし加  
 旗の去年より懐きて今にや目もくらかり。ひとり虎口を殺脱して  
 ちくさよと幾遍う身の暇をあらととも。鞘絵の二歩も退くと其に黄泉  
 のちん俱とあま回答ちりし。群立る大軍へ会釈ゆる突てつり。破拂大  
 刀風吹偃は草も血は浸さし。おろぐ枕は五騎三騎移れぬ敵のうり  
 けり。鞘絵がその日の打扮は紫格子と織るる直垂小菊絨をさげく。く  
 崩黄威の肚甲袖つけく。三尺五寸の大刀と佩。廿四差する圓羽の征箭の  
 射達く。次谷さよは脊負つ。重藤の弓は迫弦く。連鉄芦毛の駿馬は  
 金覆輪の鞍もた。澄長は弛哩とうち踏。又はあまなる黒髪は後へ

さるとうらうら。天巻と額。當白打出の登仰及小著る。遠山の眉  
 丹花の唇美目の容貌も萌爛。亨年さつひ二十八現未嘗有の勇婦も  
 父のぬ小窓城。夫を佐く。景と対する。東海の烈女も。形名が妻もいさ  
 こさふ。ちくべた。頻は古城根の。こさとく。ひとり抽で大刀と合する  
 ののろろと。敵食とて目をうけく。十重二十重は圍。鞘絵は主の  
 先途はゆあ。身は只一騎。わたり。心や。焦燥て近づく敵を  
 蹄ふ。け。左は神。右は當り。を人郷は入る。又一條の血路を  
 き。遠へ。と馳出る。を。これを。浩如。遠に州。人  
 氏内田三郎平季吉。主後三騎馬を。透間。追。鞘絵は  
 信とえ。り。物。や。と。の。引。か。馳。ち。か。先へ進  
 軍兵が。體の。角。を。と。會。目。上。く。揚。く。矢。声。を。か。入。礫。は。後。



恩顧勇敢有斯せ。君父の仇を報んとせらるるこそなむ。さうなむ。うち  
 釋さるるのいとく。一切許容るるけりとも。なほさるるべし。直忠者め。義盛  
 今只管小彼女をこまうと。別小仔細ゆらむ。但枕席共は。勇  
 子孫を取らんぬ。いづでう御事いづたと。辞を放ち。身ふくえて。余乞と  
 老る。久鎌倉殿。頼由今更小義盛が父祖三世の忠義。よひて。えかてて。  
 竟小恩免あり。いづ。義盛大に。執ひて。聽て。鞠絵を。こころ。宿  
 所へ傳ひたり。却義盛盛のころを。ゆる。老女們。鞠絵と勤り。耐えさせ。  
 自由又衣裳整へ。改め。對面。さ。その。私。宿恨。る。と。敵と  
 ろの。躬方。たる。こ。武。夫。の。程。る。今。又。何。と。い。ふ。べ。其。此。度。恩。賞。小  
 結んと。あらむ。形。い。け。り。夫。婦。小。わ。り。て。勇。と。子。孫。小。送。ん。ぬ。の。と。かん  
 才。も。既。君。父。の。為。小。志。の。致。し。り。お。成。辨。ひ。と。義。盛。が。仇。使。と。仇。使。と。い。は。し。  
 と。正。首。小。相。禪。ハ。鞠。絵。ハ。親。を。更。め。と。か。く。も。さ。る。と。過。世。あ。や。り。  
 因。縁。入。老。ろ。と。の。忠。臣。ハ。二。君。小。仕。む。貞。女。の。で。う。兩。丈。小。見。え。ん。生。て。操。成。  
 破。ん。と。り。死。し。と。世。小。恥。る。た。と。下。の。け。と。は。り。ゆ。ら。る。と。く。小。入。の。情。を。  
 老。ら。ぬ。小。似。たり。老。才。の。い。づ。の。旨。め。も。負。う。妻。中。亦。亡。君。又。負。さ。は。結。  
 老。女。々。と。率。命。ま。い。ひ。に。傷。の。人。を。遠。離。め。と。い。は。義。盛。こ。ろ。ゆ。て。  
 老。女。們。を。退。せ。その。情。由。を。問。へ。鞠。絵。ハ。頻。り。小。嗟。嘆。し。り。ゆ。り。人。の。智。者。  
 勇士。和。由。漢。も。る。く。小。その。子。ハ。親。又。劣。り。侍。り。む。と。そ。の。父。の。氣。然。稟。と。母。  
 小。の。肯。び。と。い。は。る。小。こ。こ。は。又。産。せ。と。その。甲。斐。る。小。後。悔。く。と。さ。る。人。  
 兼。引。と。死。一。加。旗。コ。ハ。腹。中。木。曾。殿。の。胤。を。宿。く。と。も。四。个。丹。ぬ。る。り。ゆ。り。  
 父。を。ら。ぬ。る。り。ま。り。流。石。ハ。惜。ら。余。る。と。も。他。丈。又。仇。と。任。せ。と。た。ハ

才も既君父の為小志の致しり。お成辨ひと義盛が仇使と仇使といはし  
 と正首小相禪ハ鞠絵ハ親を更めとかくもさるると過世あやり  
 因縁入老ろとの忠臣ハ二君小仕む貞女のでう兩丈小見えん生て操成  
 破んとり死しと世小恥るたと下のけとばかりゆらるるとく小入の情を  
 老らぬ小似たり老才のいづの旨めも負う妻中亦亡君又負さは結  
 老女々と率命まいひに傷の人を遠離めといは義盛ころゆて  
 老女們を退せその情由を問へ鞠絵ハ頻り小嗟嘆しりゆり人の智者  
 勇士和由漢もるく小その子ハ親又劣り侍りむとその父の氣然稟と母  
 小の肯びといはる小ここは又産せとその甲斐る小後悔くとさる人  
 兼引と死一加旗コハ腹中木曾殿の胤を宿くとも四个丹ぬるりゆり  
 父をらぬるりまり流石ハ惜ら余るとも他丈又仇と任せとたハ



あつてはせむしとて人喰傷しとて多し。啞子やあつてん。壁ぬやちうん。  
 生きた憑一とてとて。指し笑みのさへわれ。義盛のいとく。あつてん。  
 多るがのづから。愛するこころのりけり。現るひ内ふある。人の気色の倅に  
 して。鞠絵の宵ふま。雲霧のこる月日の形あり。又うち歎く。夕ぐせ。小乳母  
 葉も中賺してや。阿三九がゆとて。むつくる声のまどけ。むつて。あつてん。  
 てたつ子くる。渠中ふんを母の形。おぼろふとて。あつてん。あつてん。  
 ぐひる多し。こい。中なるえんと。あつてん。お長。盛の女童。鞠絵をゆ。あつてん。  
 する室の内へ招たし。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。  
 よう。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。  
 まど。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。  
 のめ。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。

その乳頭。頭はそと。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。  
 せむし。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。  
 勇士の子。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。  
 親の喜び。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。  
 戒の。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。  
 佐助朝。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。  
 忠義を。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。  
 利。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。  
 俱利迦羅丸と名け。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。  
 親と。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。あつてん。



あり子とて三歳の小児のるは出家を勧む牽出物とてまらぬおぢりあり。  
 相摸たる和田の岬の義盛が采地あり。彼知りの女僧院あり。その子と乳母小  
 抱へて翌八岬へ赴けり。後まやても親子が衣食の足りく贈り奉るべし。その  
 子が得度なるやその末途するところをさぐるに口のうるさき己て成るまじ  
 如此とてうひぬ。ころころまじりぬひそと正首小親示し。刃とやをて斬り納て  
 妻がなるとり小園たて。衝と刃を起しと出ぬり。鞘終に額をおさげてうち  
 受くゆり浅すく。若しは西月の浮雲小懸む樹下雨を漏る。この世に假乃一笠  
 やどり。長くもあはぬ命とて豫とぞと又さうぬ。さうぬを竟終と究めり。こが  
 へや舎へとて立ちまら啼く。むれく熟睡せし阿三丸小枕させ夜衣被る  
 伊小く乳母葉のむらざりけり。現人世の榮枯得失今よなればぬ。こころのぐら。  
 木西月照せさせる。まら。野の人は冊と金の几玉の床綾羅小綿袴ふをたれて  
 寢室のりあがり稚子るととも襟裾より謙倉武士の未子子と生ゆ変り  
 そがう小癩人とておとららと。小憚る前世の報。てとて。おて抱た  
 場膝は載揺動てもまら。まぬ寝自臥雲時より熟視り。西の東もまらぬ  
 子小ひまらと。おぢりつとて竹吹う辨めふべし。いふく益るはとまらぬ。浮世  
 の義理の柵小かる。勢多めお際めく。真奈のそと命ぞと。思ひ終て。假寐の夢  
 小ひまらと。おぢりつとて竹吹う辨めふべし。いふく益るはとまらぬ。浮世  
 身と汚せざと。月日を送ると稚子と人よせんぬえ。まら。小ひまらと。おぢりつとて竹吹う辨めふべし。いふく益るはとまらぬ。浮世  
 蛭見の神小異なり。三羊狩るまら。足立ど。てと。おぢりつとて竹吹う辨めふべし。いふく益るはとまらぬ。浮世  
 やつら流さと。その千劍振神の代り子と捨ぬひ。親心いふやありけん。味  
 茅原曲ら小まら。ねとも子へ差る。西の宮難波の浦は跡垂と。うらあは  
 つけく。まら。まら。親心いふやありけん。味

和名・益



かき木あは

たのまれ茶の

柄ととるよ

やむとらさぬ

せうそつかけ

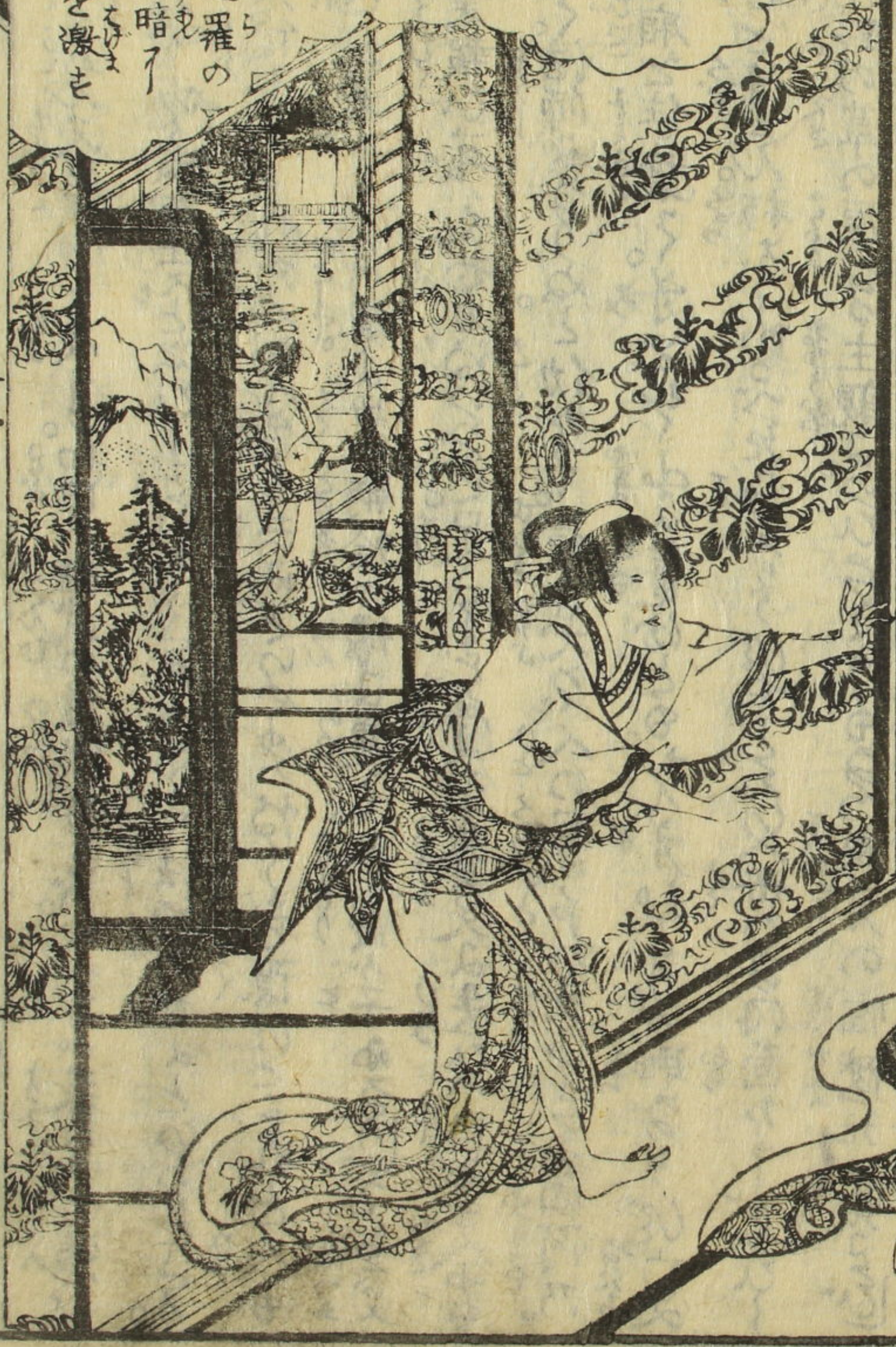
為家卿

とら

三十九



俱利伽羅の  
戒刀暗了  
母子を激き





抱き締まがよと泣。幼主を横はて。衣領をむらけけ乳は推ろと。哽むとやど  
 敵を著る乳母も共は声を吞て泣より外は走らば。朝待のころおれ。  
 洩りやせんと亮隔を引よせし。やよ葉は縁故我生。不駭はせぬ。月由  
 泣きこぼる。憎しとあらねど親しく子殺す。什麼苟且のすみぢうんや。  
 明地ゆらひり。こがう入とあせ。おのあせ。益も死に。その子を  
 措て疾退す。連係せし。後悔まるといひ。刀をとる直し。あはれ。城  
 よせ。と身を指小背向より。声をぬけり。情由をゆき。禁る。飲と  
 思ふ。さぶさぶあり。和子の入より。更起り。あ。の殿の仰せ。り。ゆ。  
 和君がもより。ごち。の。蝶の顛末不意彼。又。竊中。たり。ぬ。ぬ。さ。ろ。愕く。  
 ま。ま。せ。必死と。む。ひ。決め。ぬ。理り。逼て。ろ。ろ。く。小。林。あ。る。成。鳴。呼。べ。と思。さ。る。べ。  
 さ。ら。う。ろ。が。ら。涙。より。側。視。八。目。黒。白。も。別。ぬ。ご。ら。の。ぬ。ぬ。ま。ご。と。縁。あ。ら。ば。ご。を。襟。襟。

より乳母小ま。あり。く。と。や。三。年。その。美。さ。ひ。バ。主。後。入。城。と。推。せ。八。思。愛。の。奴。ご。ら。の。り。て。  
 且。暮。り。堂。の。珠。翳。の。花。塵。さ。入。ま。え。び。字。一。和。子。の。必。死。を。外。入。下。は。連。係。を。せ。れ。  
 そ。と。直。り。さ。る。を。憾。る。也。和。子。ハ。虚。弱。け。ち。せ。ら。ま。せ。ら。ま。せ。り。ゆ。ち。ゆ。ち。ゆ。ち。ゆ。ち。ゆ。ち。ゆ。ち。  
 晩。苗。ゆ。ら。り。然。と。く。く。人。の。ひ。ひ。で。生。涯。ち。と。さ。ら。ん。や。物。こ。ろ。え。の。詠。言。み。さ。さ。れ。  
 ぬ。ひ。ろ。大。刀。筋。あ。ら。り。ひ。ろ。く。と。も。出。家。城。燒。ら。せ。あ。ひ。ろ。が。ど。う。は。預。け。ぬ。新。書。  
 里。へ。お。供。し。く。適。男。子。は。ひ。ち。ひ。ら。ん。田。舎。の。壤。は。足。踏。固。めて。牛。ゆ。も。突。き。込。馬。  
 ゆ。も。踵。と。の。穴。肥。て。骨。逞。く。徒。男。よ。う。ぬ。と。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。の。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。  
 さ。ご。や。の。己。多。ろ。ん。ご。ら。の。良。人。ハ。安。房。四。朝。夷。郡。ち。る。大。瀨。浅。江。の。農。人。み。ゆ。い。く。豊。三。  
 六。と。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。と。會。見。ら。ぬ。ゆ。  
 憑。志。き。の。ぬ。が。ら。過。世。ご。ら。と。病。け。ひ。一。年。あ。り。う。ち。対。し。り。杖。の。調。は。償。ら。  
 せ。い。ご。と。せ。ん。せ。ん。せ。ん。ゆ。  
 その夏奉一。女と親。あ。ら。び。と。う。ら。ひ。の。ゆ。

上総の人は養をせしむる遠く乳を售てこの鎌倉へ来りぬ。良人の  
 病者平命なり。今も海を渡る死よりをりく音耗竹のし影の母也前より共  
 安房へ赴たるは波風騒ぐ世とく。港口の出船日あり。峯は嵐ちるさび  
 と。枯る木も花用び力のる果と。その後の栄を待たぬ。心と  
 聴きびり惜けくもあらず命あり。和子りろな小死なると。多ふより外なるさびと  
 口鏡つ位つ引提。刀小背つれ付る誠忠気色小頭れ。日来小他げる死練  
 言小懶。朝給へるびも。霧を涙とりろ。小合する刀と真理と棄てその身也  
 其知小磯と坐。葉子微めいひつる。乳母ハ親又異る。小念愛小絆これて。  
 刀の下は刃と厝。憑しこのもあまりある。況やこれハその子の母ハ憎しとく  
 鬼もあ。正る死奉動や。死焼野の雄夜の鶴凡生と。活る物子と。さびら  
 る死せする小母が。つら子と殺さ。さても人の道る。さびと。さるるののも  
 唇を濡して。涙りも。涙ら。織と。武夫の家。小生れ。習浴。親子の。死。阿容。と  
 法師ある。後。の織。口。今。九と殺。悲。小。や。は。と。あ。ん。これ。の。の。一。死  
 老。れ。る。そ。ろ。ろ。小。匿。び。ず。も。あ。ら。む。寔。よ。その。子。ハ。和。田。殿。の。落。る。ら。ね。ど。も。養  
 育。の。思。ひ。実。子。小。異。る。と。て。不。便。の。の。小。志。多。ひ。る。日。来。ゆ。の。他。ど。も。ひ。の  
 かく。法師。小。せ。よ。と。い。れ。る。この。戒。刀。を。あ。ら。し。む。ら。つ。つ。推。量。れ。の。あ。ま  
 り。ひ。も。る。死。魔。人。久。後。さ。も。憑。く。殺。す。織。を。賽。と。の。謎。わ。る。べ。いと  
 必。ひ。一。の。具。夫。の。首。途。母。也。子。も。あ。る。道。小。と。突。つ。け。刀。ハ。あ。る。小。の。牽。出。物  
 截。味。の。や。と。試。さ。ね。と。千。騎。萬。騎。の。敵。軍。を。破。靡。る。大。刀。風。也。子。は。名。よ  
 風。々。奈。麻。余。夫。の。甲。斐。又。る。と。その。こ。は。林。帯。れ。練。と。と。今。又。よ。あ。ひ。ひ  
 以。せ。の。僻。り。秋。それ。る。あ。ら。ぬ。綱。の。こ。と。か。死。難。題。よ。ひ。あ。ち。ら。す。と  
 足。ら。さ。し。言。さ。し。伸。由。竭。さ。し。苦。死。宵。を。精。せ。よ。と。い。く。且。く。死。吟。は

月鏡初編 卷一

十一



既よる丸が為る中第一の養親の記念に田満仲の遺物とて源家よ  
 うある室刀のまじりその説に莫邪の玉と截鐵を辟くとむる  
 夢の試さびの行成のくその能とあへん今面りあまろとてこの子の備は  
 まへけいといひつ刃とより速く腹へさすと突されこれいと騒ぐ葉子と  
 ある立首まゝと推禁めく深濖は屈せぬ息と吻死をば死時死さるゝ死  
 まるゆのまじり恥ありといゆへ人の金ろのま言のまひあひしうとれろく  
 勇もたろ名もろくお恥ろく死のせさるべし粟津乃原の敗軍に  
 勢竭く生拘ろく君が黄泉の俱ぬるま仇ある人よ身と寓く形ろ死せよ  
 形ろ死子ゆゑの闇め迷ろ煩悩の大お送り月日荒支をえび南河のまのさめて  
 知る二十年の非威や三教具足の智識もこの俱利迦羅の戒刀をれ和田殿  
 此れをあつた丸と激まともるる阿容と存命と識と腹と恥と

累後おのへやや義盛ぬ親子が命成さんとてむれろ大なるはとも  
 今とよも鮮とぶく阿三丸と為遣らばこそ只恩義を負くその  
 子が人となるんぬらこのゆけ侍へよし幸ゆくと養ろく入るまかす小才  
 長く親の智勇と稟嗣とも木曾殿の落胤とて鎌倉殿小弓と寄養又連  
 係とてあふ孝ゆもあふ忠義ゆもあふ却父祖の名と汚さん只つまも義盛  
 ぬ一戎実の父と忠ひとりその為の武勇世小ゆえ召入さる時あぶおれが  
 勇は濟ゆとまろ忠孝節義を宗とて親は仕君は仕功成名遂と身退け  
 初めの後小木曾殿の落胤と入らるるとも終く世お恥るるどいひ遠は言の  
 紫草繁くは侍へあやまらるんこそぞ滅は母が肝膽この外むのあむり  
 初めたる葉子とまじり記憶と告げ侍てて教ゆる海てて丸と  
 木曾殿義盛ぬそのこの良人豊六とやん一身ゆて三個の父あり三

歳やとく方の厝とてははる。且我幸といふべた致。又只不幸といふべた致。  
塞公我が馬致現ふ。たもこのうたも今やある。あつね工成周薄しく時を  
復し人あつね輒くた致出さるん。折ゆゆく黄昏なり。背門の冠本の鎖をね  
間ふとく起ぬの准備とせびや。といそがけ声と吻息不流き下無漬る鮮血ふ  
漫と衣の色杖の裾野と深るせり。葉木の竹毎に辱さと哀ととのぞくも  
る死袖の雨乃ぬりぬる和子のうへが三刻命ぬもとて子三をんさ  
ささるるうう羊と鐘く。物のこころのつたぬり。世の真愛のり天離る。鄙の住  
居のこびりさるる海形るたみの虫の又恋いとくるたぬん況や杖か先んま  
ゆふそその落城仰たてふ木晚哉ぬけ濡る。露は袂の朽ぬべ。銀水はゆ  
後ふら尼とるりても存命と。科戸の風のそとく小使り成竹せてゆらば  
よは懸く辱く。憂を慰むよまごとも。たつらまりのを榜繩のたつらま

別は我假寐の夢ゆもたどどとあり。今ぞ一世の辞別や。母御前の臨終ふ  
是多のむや是多の起ても現る。再寐せし昏稚児を抱け揚るも力るく。  
朝絵がほとりへさうあまれの引著て目を睨た賢愚その差ありといふも。  
形貌の父と母は菓子とて親は青さるめへの病痴の致すとてろわんえ。  
け下りゆこそ多魂影躬ふそめく力を戮し。或る男智恵の父の志願は  
養父の如く。椿力の母は十倍せば。壮士とるさでやん巴人。志願とて朝絵が  
自殺とていへ。和田殿苗ゆめふも。そがまはあつね田りて久後却ひり  
る。一旦艱苦の街衢は走りく。その助骨を固せびり竟ぬ。男士とるりて。  
さういふ人の常言小三とび骨を折く後良医とあるといふあり。その白  
絹の父の像見の戒刀の養父の記念兩るが血が流る母の記念のこま  
たふと傷口を致さ入る。五臓と脛を引かき。隻子小つ子を推仰けて。



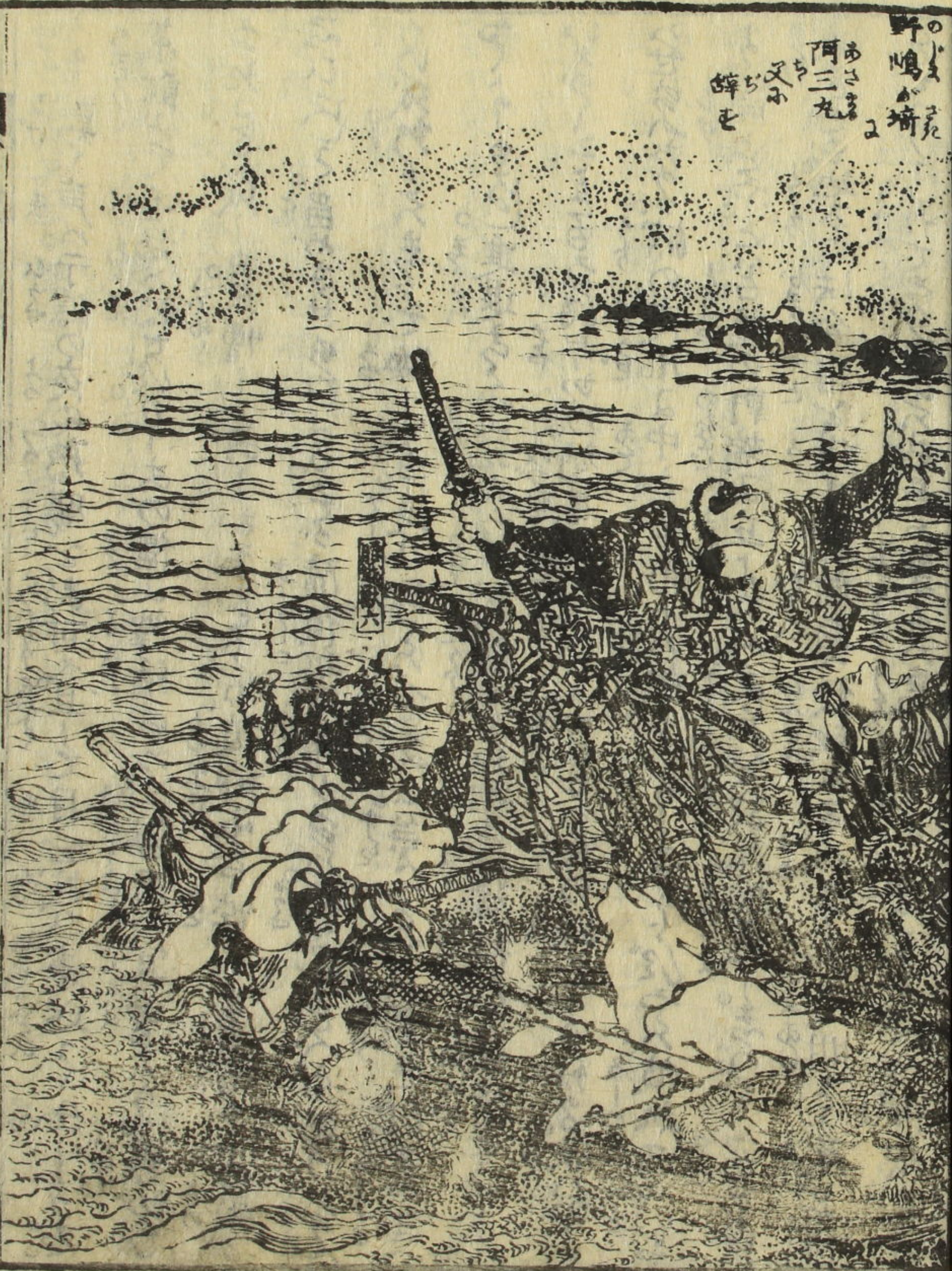


こが子え汝乳母の合際ゆく。理なき俱しく逐電せは是則盜賊あり。その刃ふ  
 崇るらんや彼推とらんと敦圍べ唯と意て婢們群こし走まらん引戻さんと  
 たるは室内俄頃又陰こと吹入る風毛骨と豎て障子亮隔鳴るこめ死  
 たり鬼んとせ婢們へこ色中あつて踏こ引久ささくくろ共は尻  
 居小控と轉輓の羨盛やましく焦燥く。燭撥遣り。衛と寄て挿んとする  
 腕癱麻く。さるる雲氣翹ぐ。忙然するその隙又葉の背する阿三  
 九と又揺揚て閃りと下る縁起より庭の木立を潜脱く。颯と推むく片  
 折戸。おとす前面うら門の鎖ぬ回ふと走去ぬ。

初輯第二 月夜乃 竊立鳥 鷄鳴の野島船

却後乳母葉の阿三九を脊負つ月と燭ゆりく走る程小腹裡よむり

やう稲村小壺の濱辺ると中安房上総へこは船毎日ありと豫め貸とも  
 彼知へ下り行近り。苦曹帆るを格あむ。君所の人追蒐来り引續  
 されるが。ゆるるた雨ぬ。金澤かる野嶋へいゆか追めありともころる  
 つつて輒く前面へこは。色と忽地は尋思り。東と投く喘く足信して  
 走るめり。背小兒を載く。いとあく疲労果てあの運果敢てを  
 辛く子二の件。海辺は来るとと真夜中る。秘と出さる  
 一碗の白湯とも。もむとあひし浦の台屋の戸を敲く。ふてくし  
 意せ。只軒の声出る。せんさぶる。破馴し松成。今宵のありと立きて  
 びるる。枝は夜露成。禦せやがて株。尻をけて。ふふちかて阿三九を背より  
 搔おろ。月の光ととらぬ。眠るが如く。死せるが如く。揺晃して。活ても  
 息もせ。動をもせ。宵澄とる。ふ糸。汀渚とる。泡と共消へく



うち驚く。声の于海の夜の残の賜をお可入且と目を拭ひ遠迷く出く。茶餌を准めおせびり。その儘は輝きおの亡母君の冥府より。羨み。る。死に。只憎しとの。む。お。む。め。彼。仰。心。を。博。る。と。も。あ。の。の。敷。が。さ。ひ。と。く。留。め。さ。せ。ひ。し。る。そ。が。隨。彼。如。く。留。り。る。が。又。せん。ま。よ。あ。り。る。え。の。残。ち。と。も。悔。し。も。ま。り。出。て。今。又。は。言。へ。と。の。還。き。は。昔。里。へ。お。の。も。ひ。進。退。ま。ふ。究。り。ぬ。只。亡。骸。を。抱。き。波。波。被。た。て。水。層。と。う。え。ん。い。ま。く。そ。も。も。る。海。早。かり。鳩。尾。些。燐。ゆ。く。左。の。の。虫。の。跂。む。り。わ。る。旅。の。か。よ。い。せ。あ。ら。る。浦。の。夜。風。中。き。も。あ。ら。る。救。る。よ。う。も。な。ら。ば。被。れ。乃。門。ま。ま。ぐ。開。き。と。と。名。屋。の。軒。端。は。立。より。の。又。戸。を。鼓。た。ぬ。先。し。ま。ぐ。宿。り。残。求。ま。も。地。方。の。法。令。宿。を。借。さ。ぎ。前。面。へ。便。敷。ま。る。入。る。と。天。明。く。来。や。せ。と。と。う。り。ふ。再。て。さ。り。も。あ。ら。る。葉。の。の。鳥。乱。こ。と。人。死。う。う。み。ら。廿。九。た。り。

かのて涙の泉掬びあふむ。月の影寒き玉兔の西へ波風を降る。抱た方よとどろく音小磯那鳥友おどろく。津波の鼓は合まる松の琴。遠寺の鐘の音添ひて。諸行を常と告ぐる。長汀曲浦の羈旅の天つら。秋の影寒き玉兔の西へ波風を降る。月の影寒き玉兔の西へ波風を降る。霜の東も去ろく。野兵十人のあやみ。葉の追菟を。焼残し。蕉火を投捨て。主君の仰成受四面四境へ部。谷七郷の出口。荒後の松は鳥帽子嶋首。せど尾のえ申。裸嶋より。

まづ逢へ世話よふさう縁うら乳の人馬士秘改ふむとも山越  
 せび水の中へ刺截おろしつゝ入は刺著草被てひぐらゆせん和子と邊  
 よく縛をきく受よと聞えり豫く先給の葉ひはるるくは逃もせびある  
 撃や獸六との生命るがさもあつらん人おのくその主のあふまれば  
 亦鞠絵清井舟の送言重くおろたこの男は抱ふと命めけて郎君とまづら  
 預りむる女子むとりと大勢く引立ゆくとの嗚呼るまじやとのいせと  
 めんど獸六の眼尻睨り足踏鳴ひさそほふらう舌長し彼縛よと敷圍の  
 うけあつると野兵とも衝とあせあめく稚見と奪ひとらんと葉ひが懐へひと  
 突入く引出まはるの逃とさして携れば突退躊躇らる改唇へ素き衣  
 破れ轉輾どるほ放さば挑争ひ泣叫ぶ声よ引とく一因の遊魂西より  
 閃たまふ糾まるが如た阿三丸が宵月のほよりへ礮と落ちて懐へるとぞええ

不思議るるる息後し阿三丸忽地甦生あく血気力量ヨ病るる三歳乃小  
 兒はひぎ葉ひ小抱まるがう左右の巻は働し解と掛る兵士は撥退るる  
 ろくさうと撞と投著まひの駄届ぬ野兵まてひ小墮て助斗を起て八鈴端  
 携る浪ひ象棋倒の流足後ゆら立ゆらりけりある奇特小葉ひらら  
 驚き且給びこぞ正しく母神井の霊魂和子と備りぬぬささ枯木よ  
 花を雨く朽る條も実以結が現有るは験奇持るゆ久後を衛らせ  
 多飲しやと三男と立前面小呆る獸六の武者戦して刀鞘ふは鉄掛軟骨唾子と  
 のどく小兒は他げられた力量早技頑くは実の阿三丸るは推量とくは  
 是能見坂の野枕るらひ侍後川の水虎るるんこま眉毛め唾と引ら抗  
 鼻禪とも固く尻の油烹涼るどてを准信せの尻の戸鎖へ堅固えまねや組ん  
 と背を二三四うち鼓じ左右の膝よひ蹴りつゝ力足と踏蹴まよ向んとまる

浴ふたき砂礫さだりけりや尻居しりい小撞せうしやうと轉輾てんてん吐嗟とつたと叫びなく腰と拵こしら面を  
 撃うつて力と起た。ある足場あしあころけまば高たかの堂どうゆめ水みづの漏もらる況きわや汝なんぢの  
 血ちうち碎つぶく手て浮うつるまる生な拍ぱんといと易やす久く其その知しる退たいそと沙さちち拵こしらひの  
 の目め打うちと舌しのく濕しく又懲おそままふ立たち向むかハハ阿あ三さん九く倍ばいと疾視しやくしてぞれ獸う六ろく  
 無な礼らいの母ははの自殺じそくハハここななああるるふ今又父いふちの使し成なり阻こす不ふ孝こうと醜みにくままべべううのああ  
 祐すけど。ここのヨよヲを病やまのああ疾しやくひて早晩さうばん又また愛あいを失しひ一旦いつたん劫きやくええ成なり受うるるふ所以ゆゑ  
 召よせせふふとてといいふふ一切いっけつととはは立たちびびああるるいいののりりままるるそそのの却かへ親おやのああ過と失しをを  
 世よ不ふ廣ひろううまるるののゆゆいいとと乳ち母はは夫とと婦ひと成なり親おやとと懲おそままふふががくく苦く中ちゆうのの苦く疾しやく嗽せう  
 人ひとの中ちゆうなるる人ひとと成なり。或あるまま数かずゆめ入いれんんととたたるる再さい會かいをを許ゆるささせせぬぬががおおんん過と  
 失し成なり人ひとゆめああるるせせままむむ母はは不ふ孝こうのの罪つみ科か成なり贖あがなふふととままるるととるるいいぬぬべべ。只ただ今いま仰おほせ  
 隨まるるががいたいた母ははのの志こころ延のび父ちちののああんんるるるる。罪つみ成なりててくくままるるののよよとと口くちづづらら

よよくくああるる世よとといいてて腰こし越こすす獸う六ろくののああひひくく呆おろまますす古ふると吐はたた三さん才さいああるるああはあ  
 ぬぬららぬぬりり九くととああるる藥くすりするる辨わ言げんああるるららじじままのの只ただ物ものががいいららままるる飲の怪くわい物ぶつああるる  
 ととそそわわくくゆゆららむむのの後のち難がた道みちとといいふふべべ。ととららるるもも鞍くら兵へいのの既すではは怒いか腹はらをを懲おそ  
 一いちかかままをを勅しやくゆるゆるこれこれむむととりり。毛けとと吹ふ海うみとと求もとんん。ままりりあありりててゆゆめめああけけ加か勢せうとと  
 ととてて復また来きるるんん正ただららうう敵てきはは背せいとといいせせてて逃にげるるんんととああののめめののれれひひ續つけけ。  
 とと逸よこ足あし出でるる跡あととといいふふととててままるるゆゆめめ一いち塊かたまりはは倒たふささるる。鞍くら兵へいののああれれとといい  
 一いち町まちああるる先まききとといいふふ獸う六ろくとと信まこととといいふふ。或あるははみみ抗か扇あふとといいふふ洲す崎さ金かね澤ざいの  
 入い江えとと遠とほりり。鎌かま倉くらののここええああるる隊たいのの頭あたまへへ腰こし越こすす獸う六ろくとといいふふ解と  
 目め欽きん誘いゆゆるる共ともふふるるんん結むすぶぶけけああるるとといいふふ。むむああくくとといいふふとと味あじ鴨かひのの騷さわくく  
 如ごとくく逃にげ亡なるる。ここの時とき既すではは天あまのの明あつつ苔こけ屋やのの門かど張ひ開ひらかかるる。件くだんののるる体たいとといいふふ浦うら入い

ちのえん ちのえん 咄と笑ひふ乳母もさるる眉とむらたむ。かて彼小禪ひん。安  
 房もて船を借入といふ後の崇のちをさるる浦人ホの既なる小児の勇力  
 古と巻て凡入るはとむひふ。さるる推辞はむ。皆屋の内へ招たれ。叮嚀は  
 敷待て早飯を勧る程は船の櫓を建管成とり入。準備をやくも整正へ舟  
 人ホのあひく。主後我杖乗せて帆と揚櫓と操つ。野島が場は漕ぎも今船も  
 順風るる。波上平はて船のまるまると速う。さる程は阿三九の追捕の兵隊六が  
 追えし。張の悍く勇るる。さる程は尋常の小児の如く。船中おたび。鼓を響みる。  
 記憶をさるる。如し。さるれ健るる。さる程は。まのふ。他さる。ける。葉の此さる。つ。  
 彼成也。不可思議なる。比皆靈魂の冥助ふ。ゆは。後いやく。響。そ。風波を  
 棹め。只彼君の菩提と。後。て。廻。た。岸。舟。の。ある。まで。仏。各。と。ぞ。わ。り。ける。

朝夷巡嶋記全傳卷之一終

朝夷巡嶋記

